〔巻頭言〕

# 水曜日の男

図書館長　森　貞

図書館事務室のテレビで、ＮＨＫの連続テレビ小説『エール』を見ながら、愛妻弁当(ランチ)を食べる。これが今年度に入ってからの私の昼休みの過ごし方です。いっしょにランチをする職員の方たちとはいろんな話をしています。

「『エール』の主人公(古山裕一)のモデルとなった古関裕而（福井高専校歌の作曲者）は、『六甲おろし』(阪神タイガースの応援歌)も作曲してるんですよ。だから、校歌の歌詞を『六甲おろし』のメロディーで歌えるんですよ（実は、『闘魂込めて』（読売ジャイアンツの応援歌）や『青雲（あおぐも）たかく』（中日ドラゴンズの応援歌）—ともに古関裕而作曲—もそのメロディーで校歌が歌えます）。新入生オリエンテーションで一年生全員を対象に校歌指導ってあるんですけど、クラス担任した時なんかは、ラッパ片手に、校歌指導するんですよ。で、高専のメロディーで一通り歌わせた後に、余興として『六甲おろし』のメロディーで歌ってみせるんです。そうすると、解散後に、何人もの新入生から、『「六甲おろし」のメロディーしか頭に残ってません』って言われるんですわ。あと、体育祭とか卒業式では、吹奏楽部で校歌演奏するんですけど、私なんか、こっそり、六甲おろしのメロディー吹くんです（うまくハモります）。でも、耳の良い先生なんかには分かるようで、『森さん、六甲おろし、吹いてたやろ』って言われるんです。」

「一九八六(昭和六十)年十月十六日に阪神タイガースがセ・リーグ優勝した時、大阪ミナミにいて（宗右衛門町にある八百屋の娘さん(高校生)の家庭教師をしてました)、道頓堀川に飛び込む人たちを見て、『飛び込みたいな』って思ったんですけど、『ずぶぬれで、地下鉄御堂筋線と阪急宝塚線には乗れんな』って思って断念しました。」

「夜、うちで、ご飯食べてたら、県外の大学に行ってる息子から、『バイトに行く途中、部屋の鍵なくした。マスターキー（アパート名が入っており、建物入り口の鍵も兼ねたもの）なんやけど。』って電話あったんです。んで、車飛ばして、息子のところまで行って、アパートからバイト先までの道を、懐中電灯片手に、徒歩で往復二時間かけて探したんですけど、見つからなかったんですわ。これは弁償で、すごい出費になるなあって思ったんですけど、『もう一回バイト先



行ってみるわ』ってバイト先に行った息子から『休憩室のソファの隙間にあった』って電話あったときは、安心したのかはわかりませんが、急に足が痛くなりましたわ。」

「プレバトの影響からか、俳句の作品は多いんだけど、短歌の作品が少ないですね。『サラダ記念日』の俵万智さんの同級生（国公立文系数学対策特別クラスで私の二つ後の席で一緒に授業を受けていました）としては、もうちょっと増えるといいんだけどなあ。あと、掲載推薦原稿のここの部分はＮＧワードが使われてるんで、一応保留にして、校友会誌編集委員の先生方にご意見を伺ってみましょう。掲載不可ってなったら、『裏青樹』に回すということで。」

ここでは、紙面の都合上、ほんの一部しかご紹介できませんが、業務のこと（コロナ禍における図書館運営やブックハンティングの実施方法、校友会誌『青樹』の回読スケジュールの調整等）や家族のこと、最近笑えた話など、時には、食後のデザートを食べながら、いろんな話をしています（昨今、ソーシャル・ディスタンスが叫ばれていますが、心の距離は相当に縮まっていると思うのは私だけではないと信じています）。

もともとは、新型コロナ禍でリモート授業が続き、人恋しくなっていた私が、職員の方たちにお願いして、ランチをご一緒させていただくことになったのですが、今では、「今日はどんな話をしようかな」、「どんな話が聞けるかな」と、この時間が待ち遠しくて仕方がありません。

今では、毎日の日課となっていますが、当初は、（職員の方たちに対して遠慮する気持ちが強かったのか)毎週水曜日だけの楽しみでした。ある日、毎週水曜日にだけ図書館事務室に用事で来られる生命保険会社の方（いわゆる生保レディー）に「毎日来られているんですか？」と聞かれたことがありました。事務職員の方（八月に県内の高等教育機関に異動されました—この職員の方には、一年半に渡り、公私ともにたいへんお世話になりました）が、すかさず、「いいえ、水曜日にだけ来られているんですよ。」とお答えになられました。その時以来、私は、その生保レディーの方から「**水曜日の男**」と呼ばれています（毎日、来ているということはいまだに内緒です）。

新型コロナ禍でたいへんな時代となっていますが、私はこうしてささやかな楽しみを見つけています。本号の特集は『新型コロナ禍との向き合い方』です。力作が揃っております。是非、ご一読いただき、これらをヒントに、皆さんなりの『新型コロナ禍との向き合い方』を見つけて下さい。